令和７年度 第４回経営協議会議事要旨

日　時　　令和７年１１月１７日（月）１４時３０分～１６時００分
場　所　　本部棟２階大会議室
出席者　（学外委員）潮谷委員、武田委員、戸上委員、中尾委員、宮島委員、
　　山口委員、山田委員
　　（学内委員）野出学長、大島委員、鯉川委員、青木委員、野口委員、
　　田中委員、西郡委員
欠席者　　菅谷委員
陪席者　　大川内監事、南谷監事、小野教育学部長、中村芸術地域デザイン学部長、
　　羽石経済学部長、副島医学部長、佐藤理工学部長、鈴木農学部長

議事に先立ち、学長から学外委員の紹介があり、次いで、委員から挨拶があった。

【 審議事項 】
（１）国立大学法人佐賀大学学長選考・監察会議委員の選出について
総務部次長から、国立大学法人佐賀大学学長選考・監察会議委員の選出について説明があり、審議の結果、了承された。

【 報告事項 】
（２）令和６事業年度決算について
財務課長から、令和６年事業年度財務諸表について、令和７年８月２９日付
で文部科学省から承認された旨の報告があった。

（３）経営協議会学外委員からの意見への対応について
総務部次長から、経営協議会学外委員からの意見に対しての令和６年度及び令和５年度の各部署の取組状況について報告があった。

【 意見交換 】
（４）「佐賀大学Vision２０４０」（仮称）の作成について
学長から、本件について、経営協議会委員の皆様から広く意見を伺いたい旨の発言があり、次いで、第５期中期目標・中期計画に向けて、現行のビジョン２０３０を更に発展させた「佐賀大学Vision２０４０」（仮称）について説明があり、その後意見交換が行われた。

主な意見は下記の通り
〇少子高齢化社会の中で佐賀大学を選ぶ層は当然少なくなってくる。将来展望は期待するところではあるが、その手前の段階で、どのように学生を

惹きつけるのか、あるいは、新たにコスメティックサイエンス学環ができるが、その他の領域で医学の領域、それから教育の領域で恐らく少子高齢社会の中では変革が起きてくるだろうと思う。そういった視点がもう少し追及されてもいいのではないか。

○極めて近い将来AIの進展が知の生産や共有あるいは判断の構造そのものを変えて、教育のプロセスに間違いなく深く入り込んでくる。その一方で、深い洞察や価値観に基づく「問い」はAIでは成し得ない。そういった本質的な問いやその実現に向けた戦略ストーリーを構築できるような力を佐大生には身に着けてもらいたい。

○自治体、大学、地域住民が佐賀の未来像について同じ方向を向いて取り組むような姿は実現出来たら素晴らしいと思う。学生が地域社会の現場で試行錯誤をして、挑戦と失敗を通して学びを深めて、教育研究地域実装を循環させる構造を整備できるようなエコシステムをぜひ作っていただきたい。

○佐賀大学がアジアを中心とする国際連携を進化させるプランにおいては、地域の課題解決と国際社会の課題解決をうまくマッチさせて、その知の双方向循環の設計というものをしていくことが不可欠ではないかと感じる。要は、地方の知を地域で閉じずにグローバルな課題と接続させて、世界から学生や研究者が集まる仕組みをぜひとも作っていただけたらと思う。

○共同研究を大学側に丸投げにするのではなく、企業側で持つ相当充実した試験設備等を使って研究を進めることができれば今後楽しくなると思う。

○医療の世界で、画像解析などでもどうか人の目に頼らずにAIをどんどん高度化させ、人間が見落とした事例を共有して、今後のために役に立てていますというようなアピールを病院現場でされてはどうか。

○佐賀県外から来てくれた学生にどうやったら佐賀の魅力あるいは佐賀への就職、場合によっては生活の場に選ばれる可能性があるのかということを意識したようなプログラムやカリキュラムを考えられないか。そして、今就職市場は売り手市場なので、今まで佐賀大学生がいかなかったような領域あるいは、非常に先端的な取り組みで大きな業績を上げている企業への就活を積極的に指導いただきたい。

○佐賀大学は地域に焼き物の伝統があり、ずっと美術の良い伝統をはぐく

んできたというのもあるし、国立大学でも珍しく美術館を持っているというのがあるので、他大学にはない個性を出すという意味では、美術というのは一つの切り口ではないか。

○少子化で地元志向が強くなっており、九州の学生が佐賀大学を志願する土壌はあるのでいい傾向ではある。大都市である福岡に近い大学なので、その恵まれた点を活かして明るい未来を作ってほしい。

○外国に比べて日本人の修士、博士の数が少なすぎる今、４年、２年と途切れている学部と修士を５年制に統合するという案が審議されていて３つのポリシーとどう整合性をとるのか、また企業が今まで４年制を即戦力として採用していたのにこれから先、修士や博士の人をどう受け入れていくのかについて、佐賀大学がどういうポジショニングで対応していくのかというのは議論しておいたほうが良いのではないかと思う。

○佐賀大学学生の地元での就職率を上げるためには、地元の産業界の責任が勿論大きいわけだが、インターンシップや学生が地元産業について勉強する機会を設けることや、地元産業が大学の授業に対して講師を派遣する等、県立大学とのコラボも含めて、ぜひ地元産業界に就職する率を大幅に上げていただきたい。

○佐賀大学はダイヤモンド半導体の技術があるわけで、国の政策の中でどう役割を果たすか。具体的に言うと、半導体のサイエンスパークに熊本、北九州が手を挙げているが、例えば熊本、北九州に出張所を設けてその中にインボルブされる、あるいはその時々の情報を仕入れるような仕組みを構築し、それをまた大学運営カリキュラムに生かすというようなことがすごく重要だと思う。

○財政問題のことと全教職員の中に今回の論議をどう浸透させていくかという方法論を含めて課題があるかと思う。

以上